

〔研究ノート〕

初期の「百舌鳥・古市王権」が営んだ宮都周辺の原風景 The Original Scenery around Kings Capitals in the Early Mozu-Furuichi Kingship

坪井 恒彦
TSUBOI Tsunehiko

I はじめに

墳丘本体の長さが500メートルを遥かに超す空前絶後の大王陵を筆頭に、巨大な前方後円墳群が5世紀代を中心に造営され続けた「百舌鳥・古市古墳群」。2019年に大阪府内で唯一登録されたこの世界文化遺産を巡っては、当時の倭国（古代日本）の為政者を葬った陵墓との認識は行き渡っているものの、その王権の具体的な実相は未だ明らかにされてはいない。例えば、これらの大王陵の分布域と彼らの王権の政治的な拠点の位置関係についても不透明だ。すなわち、4世紀中葉以降、奈良盆地北端の平城（佐紀）丘陵周辺に展開していた倭国王墓群と推定される墳丘長200メートルを超す大型前方後円墳のグループが、4世紀末になるとその勢いを弱めていき、替わって大阪平野南部、河内平野（和泉領域を含む）に位置する百舌鳥・古市地域に移動し、その規模を一挙に増幅させていく。これらの古墳群の造営主体となった王権、政治勢力の中核部の王宮、あるいは宮居、宮室、それらを核とする宮都の所在地や景観をいかにかという問題である。

百舌鳥・古市古墳群が営まれた河内平野が王権の本貫の地であるとする立場からは、この王権の勢力が主体となった政治集団を「河内政権」と呼びならわされる。その主要な政治的拠点は本来、河内平野を含む大阪湾岸エリアとその周辺に求めるべきだとされる。一方、王権の本質は大王陵の分布域とは関係なく、彼らの政治的な拠点の舞台、その所在地にこそ見出されるべきだという見解もある。その見方からは彼らの王宮の確固とした痕跡（考古学的な遺跡を含めた）が河内平野や周辺に見出せないとして「河内政権」否定論も根強い。すなわち、倭国の王権は大王陵の移動とは関係なく、政治的な拠点を一貫して大和に置き、大王陵やそれに伴う王権メンバーの墳墓のみが河内平野に移動されたとする¹⁾。

さらに、この論議は、「王朝交替説」論争という戦後の古代史学界を席卷したテーマにもつながる。つまり、この一連の墳墓群の移動をもって、佐紀古墳群以前の奈良盆地東南部の大和・柳本古墳群を含む大和を基盤とした勢力が、新たに登場して百舌鳥・古市古墳群を造営した別の勢力に打倒され、倭国の政権が取って替わられたとするのが「王朝交替説」である。ただ、今日では佐紀の大王陵群とそのすぐ後に続く百舌鳥・古市のそれらは、前方後円墳の設計理念、埴輪や副葬品などの埋納スタイル、葬送祭祀においてもほぼ完全に継承されている事実から、この説は少数派になりつつある。筑紫などまったく別の地域から渡来した勢力が、その集団の最も基本的アイデンティティーとも言える葬送文化において、大和の王権の伝統的な慣習を完全に踏襲するとは考え難いとするのが主な理由である。

このような議論を踏まえ、白石太一郎氏は、佐紀から百舌鳥・古市への大王陵などの移動を河内勢力によるその本貫地の性格を重視しつつ、この勢力は元来倭国王権内部に成長し続けた集団で、4世紀末から台頭して倭国王権内の盟主権を奪い、独自の政権を誕生させたのだと説く²⁾。倭国の王権がそれまでの佐紀勢力から河内勢力に移行したとすれば、この時代、政治的センターである王宮はどのように選択され、決定されたのか、改めて問われる。大王（天皇）一代ごとに王宮によって構成される宮都が場所や名前を替えた「歴代遷宮」の古代日本におけるその実体は、7世紀の飛鳥時代より遡るとほとんどわかっていないのが実情だ。ただ、『古事記』『日本書紀』や『延喜式』などには地名を含む各宮都の呼称が示されており、一定の手がかりとして期待される。そこで本稿では、白石説に寄り添いつつ、宮都の所在地のイメージを含めてある種の固定観念が生まれつつある「河内王権」、あるいはその王権が担い執行した「河内政権」という呼称を一旦ペンディングして百舌鳥・古市古墳群を出現させた勢力を客観的に「百舌鳥・古市王権」と位置付け、その前半期、4世紀後葉から5世紀半ばにかけて各大王たちが営んでいたであろう宮都と、その周辺を今一度洗い直し、この王権の政治的なセンターの実体を探求していきたい。

Ⅱ 「最古の王宮」を伺わせる纏向遺跡の大型建物跡

個別具体的な検討に入る前に、宮都の都市的な意味について押さえておきたい。一般集落から都市への発展段階と、首長制社会から国家への形成過程は、同じような軌道をたどるとされる。つまり、首長制社会の集落が発展してくると、その規模の巨大化が人口密度の高まりをもたらし、専業工人や商人、官吏といった非食糧生産者たちが進出し、倉庫や公共施設などの巨大建造物が出現する。そして元来その周辺では存在しない素材や原料なども流通するようになり、そのような様々な属性の集合体としての都市が生まれたという。結果として、それまでの首長制社会では首長一人が中央に寄せられた情報をすべて処理し得たのに対し、都市社会として特徴づけられる国家段階になると、情報は格段に大量化、多様化し、それらに対応するための官僚機構が必要となる³⁾。言い換えれば、都市的な様相を示す考古学上の遺構群の確認は、初期の国家段階を推認させ得るし、場合によってはそれらの官僚機構のトップに立つ王の宮都の存在を裏付けられるかもしれない。

例えば、大型化かつ定型化された前方後円墳出現前後の3世紀半ば、奈良県桜井市に見られる纏向遺跡は東西2キロ、南北1.5キロに広がる初期の都市的性格が強いとされる現場だ。箸墓古墳（墳丘長280メートル）と、それ以前の未定型の前方後円形墳丘墓6基を備える。とくに、当時、新たに計画的に設計された物資運搬用の運河が巡らされ、東海や北陸、吉備、北部九州、朝鮮半島など多様な地域から搬入されたり、模倣されたりした土器は15%を超すなどから都市性が指摘されてきた⁴⁾。そこに、2009年の166次調査までに明らかになったのが、床面積238平方メートルに及ぶ大型建物遺構を中心とする計画的な中枢施設である。南北19.2メートル、東西12.4メートルで東西方向の同一の中軸線上の西方に他に3棟の建物が配置されていたことも明らかになった。東西約80メートルの直線状に中軸を合わせて4棟が計画的に配置されていたのである。

大型建物跡など東側の3棟は柵内に区画されていたとみられ、周囲から延べ40メートル以上の柵列跡も見つかった。さらに2012年の調査では、大型建物を囲む柵列の南側は南北34メー

ル、東西29メートルにわたって同時期の遺構はなく、南端には東西方向の区画溝の一部が出土した。一帯は王宮のような施設を取り巻く神聖な空間で、「聖域」を確保していたこともわかった。また、大型建物の南側柵列跡からは、当時、特殊な王宮祭祀に用いた可能性のある桃の果核約2800個が埋められていたことも確認されている⁵⁾。

2世紀末から4世紀初めまでの限られた時期に登場した纏向遺跡を巡っては、中国の魏王朝から倭国王と認められたと記録される卑弥呼と後継の臺与の王宮があった「邪馬台国」の中核施設の可能性を示唆する見方もある。現段階でそれを裏付ける術はないが、当時の倭国の最古期段階の都市、あるいは国家の芽生えの原風景を見せているのかもしれない。

ところが、その4世紀初め以降、飛鳥諸宮の先駆けとして現れる大王名・諱（いみな＝実名）ヌカタベ（以下、奈良時代に淡海御船が考案した天皇名・推古）朝の豊浦宮（6世紀末）より前までの古墳時代約300年間の倭国王宮の痕跡は殆ど明らかになっていない。わずかにワカタケル（以下、同様に雄略）朝の「初瀬朝倉宮」の候補として奈良県桜井市の脇本遺跡で検出された大型建物跡の一部が挙げられる程度である⁶⁾。しかし、文献史料ではこの間、事実上の初代天皇とされる10代のミマキイリヒコ（以下、崇神）朝の「磯城瑞籬宮」をはじめ、「佐紀王権」の大王たちの諸宮、そして「百舌鳥・古市王権」の初代とみられるホムタワケ（以下、応神）朝から前述の雄略朝の王宮などが克明に記される。現状ではこの王宮名の表現から、その宮都の位置や周辺の光景を推認してその手がかりを探るアプローチもある程度参考になろう。以下の論述でも時にその手法を援用していきたい。

例えば、『日本書紀』や『延喜式』で「磯城瑞籬宮」、『古事記』で「帥木水垣宮」とする崇神の王宮名が、「所在する地域名＋王宮周辺の景観」を表現しているとすれば、磯城は現在の桜井市北方の纏向川と粟原川に挟まれた所を中心にした地域に当たる。纏向遺跡も当然その中に含まれる。前述の中核部と見られる大型建物群が確認された際、一帯は東西150メートル、南北約100メートルに渡って周辺より1メートル以上高い微高地を形成していることが判明した。しかも微高地の北辺と南辺には旧纏向川とその支流が流れていたことがわかっている。西辺には幅約8メートル、深さ1.4メートル以上の直線状の人工溝の跡が確認されており、南北の清流につながっていたとみられる。東辺は後の飛鳥時代に古代官道として整備される上ツ道の推定ルートに重なる可能性があり、その原型のような古道が敷かれていたのかもしれない。いずれにしてもこの大型建物群は、崇神の王宮であったかどうかは別にして北、西、南の三方を河川と人工溝の清流に囲まれた「水垣宮」を彷彿させるような立地、景観を呈していたと言えそうだ。

Ⅲ 「百舌鳥・古市王権」の位置付けと年代観

「百舌鳥・古市王権」の出現を考えるには、まず記・紀が百舌鳥・古市古墳群に最初に葬られた大王として明記しているホムタワケ（以下、応神）を取り上げねばならない。宮内庁によるその陵墓の治定では、古市地域に所在する誉田山古墳（墳丘長425メートル、羽曳野市）だが、考古学の基本的な編年では百舌鳥・古市地域で最古の大王陵は、その規模や形状などから誉田山より2世代程度（約40年）遡る同じ古市地域の仲津山古墳（290メートル、藤井寺市）とされる。仲津山古墳よりさらに数十年早く北西1.5キロの羽曳野丘陵北端に造営される津堂城山古墳（210メートル、藤井寺市）の被葬者は、王権内でも大王に匹敵する地位だとされるが、

それに続いて大王本人の王陵が仲津山に造営されたことになる。その応神の宮都が「百舌鳥・古市王権」最初の政治的なセンターとして捉えられるならば、この王権の性格を考える上でも、その王宮は極めて重要な位置を占める⁷⁾。

ここで改めて「百舌鳥・古市王権」の歴代大王の在位年代について私見を披歴しておきたい。筆者はこの時代における大王たちのそれを通説よりかなり遡らせて捉えている。その理由は主に百舌鳥・古市古墳群内の大王陵の考古学上の編年にある。すなわち、この王権の初代である応神の陵墓を古墳群内最古の大王陵と認められる仲津山古墳に比定し得れば、応神の没年は4世紀末、390年前後となる。今仮に当時の大王たちの平均的な在位年数を、その実際の寿命などを勘案して約20年とすれば、370年ごろから約20年間在位した応神を継承したオホサザキ（以下、仁徳）は410年ごろに亡くなり、群中二番目に古い石津山古墳（墳丘長365メートル、大阪府堺市西区）に、その後430年ごろに没したイザホワケ（以下、履中）は三番目の誉田山古墳に、450年ごろ死亡のミツハワケ（以下、反正）は大山古墳（墳丘長525メートル、堺市堺区）にそれぞれ葬られる。

このように想定すれば、宮内庁による「天皇陵」における被葬者の治定とは食い違うものの、考古学的な古墳の編年観とは大きな齟齬は生じない。これらの在位年代を文献史的に裏付けるのは難しいが、『日本書紀』の4世紀から5世紀代の歴代天皇の崩年干支が実体からかなりかけ離れているのに対し、『古事記』のそれらの一部は実年代に近いのではないかと考えている。例えば、『古事記』によると応神の崩年干支は「甲午年9月9日」としており、西暦では394年に置き換えられる。また、履中のそれは「壬申年1月3日」で432年に相当する。これらがもし、実体に沿うとすれば、筆者の想定にもかなり近づくことになる。さらに、允恭の後の安康については『古事記』は崩年干支を示しておらず、筆者も安康の即位はなかったと見る立場なので次の雄略の没年は例の平均20年刻み説で490年ごろと考える。雄略の『古事記』の崩年は「己巳年8月9日」で、489年に当たる。これも仮説を裏付けることになる。ただ、他の大王のそれらは想定とは大きくずれているので、この『古事記』の崩年干支との照合はあくまでも参考に留めておきたい。

しかし、この仮説を下敷きにすれば、文献史上、信頼性の高い中国王朝の正史『宋書』倭国伝（439年編纂開始、503年完成）に421年から478年まで5代、延べ10回に渡って中国流の官位・爵号を求め、使節を送り続けたと記録される「倭の五王」との関連が注視される。その一人目倭王・讃は履中に他ならず、記・紀の大王系譜に従えば、二人目の倭王・珍は反正、三人目の倭王・済が允恭に比定される。四人目の倭王・興を系譜に沿って安康にするには、前述のように実際の即位などに問題が残るが、五人目の倭王・武が雄略に相当することは、埼玉稲荷山古墳（墳丘長119メートル、埼玉県行田市）出土の鉄剣銘文などを根拠に大半の研究者が是認するところである。銘文中の雄略が在位した「辛亥年」は471年に相当し、478年に宋の皇帝・順帝に遣使し、上表文を送った倭王・武と時期的にも符合する⁸⁾。以下の歴代大王たちのそれぞれの宮都もこのような年代観を想定しながら後世まで伝承され続けたそれらの宮名を元に再現してみたい。

IV 「百舌鳥・古市王権」の初代、応神の宮都

「百舌鳥・古市王権」を開くことになった初代、応神の宮都として記・紀には2か所が登場

する。『日本書紀』応神22年条などに見られる「難波大隅（なにわのおおすみ）宮」と『古事記』中巻・応神段などにその天下を治めた王宮として記される「輕嶋明（かるしまのあきら）宮」である。その崩御の地として、『日本書紀』は明宮としながら、異伝として大隅宮をも挙げる。それぞれの比定地についても現・大阪市内の淀川流域を含む湾岸エリアと大和国高市郡輕（畝傍山東南部、現・奈良県橿原市大輕町）の地が取り沙汰される。

この二つの王宮の実在性については、筑紫で生まれた応神の即位前伝承の中に輕周辺に結び付くものが見られないなどから難波大隅宮を重視する見方と、架空の初代天皇カムヤマトイハレヒコ（以下、神武）が即位した王宮を畝傍山東南部とする物語は応神の王宮をモデルにしているとの仮説などから輕嶋明宮を本来の宮居と見る指摘がある⁹⁾。

応神の即位については、塚口義信氏が4世紀末に倭国政権の内部で勃発したことが記・紀から伺える「麿坂（かごさか）・忍熊王の叛乱」に注目し、政権内で正統な後継者だった忍熊王の軍勢を打倒して成し遂げたと主張されている。そして応神が自らの正当性を保証するためにそれまで語られていた神武の建国神話を改変し、記・紀に述べられていると見る¹⁰⁾。この塚口説は応神の即位、やがて「百舌鳥・古市王権」として発展する河内大王家の誕生を整合的に解釈されているように思われる。ただ、この説からは応神の宮都を神武のモデルとした畝傍山東南部（輕嶋）と同じだったと見ることも出来るし、逆に新政権として瀬戸内海ルートを重視し、その沿岸諸地域の政治勢力との深い関りを示し、応神の支持基盤を固めようという意図から大阪湾岸エリアに王宮を営んだという解釈も導き出せる。

応神台頭の背景には東アジア情勢が一気に緊迫の度を増してきたことを重視したい。この時期、大阪湾岸に政治的な拠点を構えて瀬戸内海ルートを完全に掌握する力が求められた。その具体的な動きが応神の後を継承した仁徳の段階になってより明確化する。既述のように、倭国政権としての百舌鳥・古市王権は朝鮮半島における外交・軍事両面での後ろ盾の役割を中国の宋王朝に強く要請した。宋から「倭の五王」として認識された讃・珍・済・興・武のうち、讃は履中としたが、逼迫する朝鮮半島情勢の対応は、その2代前の応神の段階から始まっていたのである。むしろ、応神の百舌鳥・古市王権が倭国政権内で佐紀王権から盟主の座を奪ったのは、それまでの伝統的・祭祀的政策に終始してきた「佐紀王権」では対応しきれなくなった朝鮮半島政策を、外交・軍事分野に秀でた「百舌鳥・古市王権」が担うようになった結果とも言えよう。先述の「麿坂・忍熊王の叛乱」は、こういった倭国政権内部での守旧派と改革派のせめぎ合いを物語風に脚色したのかもしれない。

このような百舌鳥・古市王権の初代・応神と第2代・仁徳の王宮がそれぞれ大隅、高津の位置した「難波」というこれまでの倭国王権のそれらとはまったく異なる立地を志向した背景を見直す必要がある。すなわち、中国本土や朝鮮半島に直接つながる瀬戸内海航路の東端に当たる難波という海洋交通の要衝地における王宮の役割の重要性である。その要衝地は後述のように6世紀以降の築造ともされる港津「難波津」に象徴される。しかし、「倭の五王」使節の中国への頻繁な往来や朝鮮半島との外交・交易に関わった百舌鳥・古市王権にとってこのような大規模な人工の港津の経営は必須であり、遅くとも5世紀初頭までには「原難波津」というべき港湾施設は機能していたと考える。

同様にその難波から倭国の伝統的な中枢部に当たる奈良盆地への交通路も、旧大和川を遡る水路とともに上町台地の脊梁部（現・大阪市の中心部を南北に縦断する上町筋周辺に当たる）を南下し河内平野を一気に横断して二上山系を越えて奈良盆地に入る陸路も存在していたと思

える。後述の推古朝、7世紀初頭とされる「難波大道」が上町台地上を南下し、大津道や丹比道と直角に交わった後、東進して奈良県側の横大路に通じる官道のルートが実証されつつあるが、これも5世紀段階に「原難波大道」が敷かれていたのではないか。この陸路は百舌鳥・古市古墳群の造営にも関わっただろう。要するに、外交・軍事、その基盤になった航海技術に秀でた百舌鳥・古市王権にとって原難波津、原難波大道はその屋台骨であり、その要衝地にこそ王宮を構える意味があったのだろう。前述のように佐紀王権までのように奈良盆地に政治的な拠点を置く政権は、崇神の「瑞籬（水垣）宮」に象徴されるように聖（神）域を備えた祭祀・信仰を基盤に据えていたのに対し、百舌鳥・古市王権は極めて合理的な要衝の地を王宮の地に選んでいたのだ。

その難波大隅宮の所在地を考える上でまず問題になるのが、難波における「大隅」の地名である。『日本書紀』安閑天皇2年条や『続日本紀』霊龜2年（716）条には「摂津国の大隅嶋・媛嶋」を牧（うまき）としたとあり、両嶋とも低湿地帯の中で島嶼状の地形を呈し、牛馬の放牧に使われていたことを伺わせる。その有力な候補地として挙げられてきたのが大阪市東淀川区大道町の旧名とされる「大隅」付近である。江戸中期の地誌『日本輿地通志』（1735年）でも摂津国西大道村の旧名を「大隅」としている。一帯は現在の淀川右岸に位置する低湿地帯で乾季には島嶼状を呈していた。しかし、この地域が大阪湾岸エリアに入るとは言え、宮都を営むには地盤に問題がある。日下雅義氏も、古墳時代後期の景観として現在の摂津市一津屋下流のこの辺りに広大な砂洲を復元している¹¹⁾。

この周辺に王宮を求める不自然さは、応神に続くオオサザキ（以下、仁徳）の「難波高津宮」以降、欽明の「難波祝津（はふりつ）宮」、孝徳の「難波長柄豊碕宮」、天武や聖武の「難波宮」まで5～8世紀の王宮、離宮、行宮のすべてが「難波津」に絡む上町台地上に想定されていることが挙げられる。森浩一氏は『日本書紀』の継体6年条にあるように応神の即位を約束したのは住吉（すみのえ＝墨江）大神であり、その「スミ」は「大隅宮」に通じ、「江」は潟を意味することから上町台地の北端に近い湾岸の潟部周辺を想定する¹²⁾。応神朝を「倭王の五王」の直前の時代だとすれば、朝鮮半島情勢が緊迫する中で瀬戸内海ルートの役割がすでに極めて重視されており、「原難波津」は機能を増幅させていただろう。

その候補地については、後の「難波津」が「難波堀江」に関連した港湾施設として現在の大川沿い、八軒家浜などが比定されているのに対し、上町台地脊梁部の西縁（大阪湾岸）に当てるのが自然だろう。例えば、地名伝承などから現・大阪市中央区西心斎橋の御津八幡宮周辺を挙げたい。近くには真言宗寺院・三津寺もあり、大阪湾岸の入り江に営まれた港津が古来、「御津（三津）」と呼ばれたと見られ、それが「原難波津」だった可能性もあり、応神の「大隅宮」の位置と港津の関連も伺える。応神22年条に皇妃で吉備臣出身の兄媛が故郷を偲んで高臺（たかどの）から西の海原を望んだとする景観にも合う。【写真1】



【写真1】「御津」の古地名を伝える御津八幡宮（大阪府中央区西心斎橋2）。上町台地西縁の旧海岸線に近く、周辺は「原難波津」の候補地

V 2代目・仁徳の「難波高津宮」

「難波堀江」の開削に伴って整備されたという王権直轄の港津「難波津」と王宮との関係は、応神の後継王・仁徳についても同様のことが言える。『日本書紀』によれば、「難波高津宮」が設けられたのは仁徳元年であり、「難波堀江」の開削は10年後の仁徳11年とされる。つまり、実際に建造された実年代はともかく、時系列で見ると高津宮が開かれた段階では「難波津」はもちろん、「難波堀江」もまだ開削されていなかったことになる。日下氏は、「上町台地東方の地形環境の変化、すなわちデルタの発達過程からみると、『堀江』開削の必要性が生まれるのは五世紀の中葉以降ということになる」と指摘し、工事が完了したのは6世紀初めと考える¹³⁾。とすれば、仁徳の在位年代を390年ごろから410年ごろとした自説と、『日本書紀』に見える「難波堀江」やそれに続く「難波津」の記載との間に大きな齟齬が生じることになる。しかし、それは仁徳の在位を5世紀中葉にまで下らせる通説においても同様で、『日本書紀』の編纂者は6世紀段階に完成した「難波堀江」や「難波津」を仁徳朝における業績として記録したのではなかろうか。いずれにしても、高津宮の王宮の候補地も応神の大隅宮と同じく「難波堀江」と関連付ける必要はない。

しかし、結果として『日本書紀』仁徳11年条の記事にあるように「難波堀江」が「高津宮の北の郊原」に立地したのだから、逆に難波堀江や難波津の推定位置から高津宮の候補地を導き出すことも可能かもしれない。「難波堀江」の造成は、上町台地東辺部に迫っていた縄文時代までの内海の名残を残す「河内湖（草香江）」からの氾濫を防ぐため台地北端に延びる砂洲を南北に分断して巨大な水路を新設する工事で、日下氏は現在の大川の流路に基本的には相当すると見る。そのルートは上町台地東辺に当たる城東区鳴野辺りから西に向け、現在の天満橋か

ら淀屋橋、肥後橋付近を抜けて上町台地の西辺部に開けた大阪湾にそそがせたと見られる。現在の中之島の西半分は難波の海に洗われていたようだ。

現・大阪市中央区法円坂では、孝徳朝の「前期難波宮」と聖武朝の「後期難波宮」の遺構群が重なるように確認され、その基礎部などが復元されている。現地は海拔22メートルの高台だが、西側の谷町筋寄りにも高台が広がっており、仁徳・高津宮、さらに応神・大隅宮の立地の可能性も指摘されている。もし、ここに5世紀代の王宮群が営まれていたとすれば、652年完成の孝徳朝難波長柄豊碕宮や732年完成の聖武朝難波宮とほぼ同じ場所に造営されたことになり、それらの先駆的な意味を持つことにもなる。【写真2】



【写真2】上町台地の脊梁部を縦貫する上町筋は推古朝の難波大道推定ルートだが、5世紀にも「原難波大道」が存在したか（大阪市中央区上本町1）

周辺の地理的環境を考える上でもう一つ手がかりとなるのは、上述の法円坂などの王宮候補地につながる上町台地脊梁部の南北ルートだ。この脊梁部には『日本書紀』推古16年（613）条にある「難波より京（飛鳥）に至る大道」をはじめ、孝徳朝や聖武朝の宮都の南北主軸線、朱雀大路ルートとも大筋で重なる。その原型は巨大古墳の造営を支えたインフラの可能性からも応神・仁徳朝に遡る可能性は高いと考える。大隅宮・高津宮もこの「原難波大道」に沿って、または連絡道（支道）を経て営まれたのではないかと考える。【写真3】

1987年、前期難波宮の関連調査で宮域の北西端から全国最大規模の高床倉庫群が発掘された。5世紀後半でも新段階に相当し16棟が極めて計画的に東西方向に並んでいた。すべて同じ構造で平面は東西10メートル、南北9メートルに規格されていた。遺構群は東の上町筋方向に広がっていた可能性もあり、棟数はさらに増えるかもしれない¹⁴⁾。一時、難波高津宮との関連が注目されたが、たとえ通説でさえ仁徳朝は5世紀半ばなので遺構群はその2代ほど後の時代になる。筆者の仮説では雄略朝に比定される時期で、関係はさらに遠のく。但し、現地は例の上町台地



【写真3】 7世紀半ばの孝徳朝から始まる難波宮の遺構群（一部復元、大阪市中央区法円坂1）。周辺に応神・仁徳の王宮が営まれた可能性も

脊梁部の南北ルート、現・上町筋に直結し、5世紀初めの難波高津宮期に誕生した「原難波大道」を活用してこの倉庫群が機能したことは疑えない。何故なら「難波堀江」やそれに伴う「難波津」の出現が前述の如く6世紀以降とすると倉庫群への大規模な物資の移送は「原難波大道」に限られてしまうからだ。【写真4】



【写真4】 孝徳朝などの難波宮北西から出土した5世紀後半の大規模倉庫群跡（一部復元、大阪市中央区大手前4）。上町筋に隣接し、「原難波大道」に直結していたか

VI 3代目履中の磐余稚桜宮と4代目反正の丹比柴籬宮

履中は、筆者の仮の在位年代として410年ごろから約20年間を想定しており、『宋書』では「倭の五王」の初代、讃に当たると考える。百舌鳥・古市古墳群の大王陵編年では3番目に造営された誉田山古墳の被葬者ということになる。墳丘長では全国第2位、墳丘体積では第1位を誇る誉田山古墳は、先代の石津山古墳、先々代の仲津山古墳と比べてもまったくレベルの異なる規模、景観を呈しており、大王陵に対する価値観の変動、あるいは画期が見て取れる。その前兆は、実は先代の石津山古墳の段階から始まっており、先々代の仲津山古墳、それ以前の佐紀の大王陵までは墳丘長が最大でも200メートル台後半で推移していたのに、石津山、誉田山、さらに大山古墳へと大王陵の巨大化が加速する¹⁵⁾。

その要因は仲津山古墳までは、被葬者の大王の威信が倭国内の勢力に向けられていたものが、石津山古墳の段階からは海外、中国王朝や朝鮮半島諸国へのアピールへと大きく変容していった結果ではないか。410年ごろに完成したと想定される仁徳の大王陵を石津山古墳とすれば、その造営の直接的な主体は後継の倭王・讃と想定する履中である。その讃は宋王朝に最初に使節を送り込んだ倭王であり、倭国の朝鮮半島での存在感を最大限に高めるために、宋王朝の皇帝から何としても高い官位・爵号を獲得せねばならなかった。朝鮮半島での鉄資源を確保するための経済的な覇権を得るため当時、軍事同盟を結んでいた百済と少なくとも同等以上を求めていたし、百済と敵対し、同国を上回る地位にあった高句麗と同等のそれを求めていたと思われる。

そのアピールに最も効果的に役立たせることが出来たのは、自国の大王の陵墓を諸外国よりも格段に立派に見せることだった。そのノウハウは、大王陵としての定型化・大型化した歴代の前方後円墳で培ってきていた。3世紀半ばの箸墓古墳以来、大和・柳本古墳群、佐紀古墳群を通して1世紀半に渡って国内の諸勢力に向けて彼らの首長層の墳墓を圧倒的に凌駕する大王陵としての前方後円墳の造営に腐心してきた。それを海外に向けてさらに規模・景観を巨大化させたのが、石津山古墳以降の超巨大前方後円墳である。その最初の石津山古墳が大阪湾岸の海岸線の向きと主軸線をぴったり合わせて大阪湾に進入してきた海外使節の船団が最初に目を奪われるような立地と演出が工夫されているのもうなずける。

それとは対照的に、歴代の王宮は質素なたたずまいだったようだ。問題はその立地環境である。「百舌鳥・古市」王権が大王陵群を河内平野に造営しながら、その政治的な拠点を依然として大和に置いた典型が履中の「磐余の稚桜宮」であろう。その比定地は王宮に併設したとされる「磐余池」、あるいはそれに関連する「磐余市磯池」の所在地との繋がりが重視され、それらの池の特定がカギになるとされてきた。千田稔氏は現・桜井市谷に鎮座する若桜神社周辺を有力な候補地として特に神社西方の水田区画にU字形に延びるラインを古代の皿池型ため池の堤跡と見て磐余池の可能性を指摘している¹⁶⁾。これに対し、2011年、奈良県橿原市教委の発掘調査によって橿原市東池尻町で南方から延びる5本の谷筋を北側でせき止めてダム湖とした堤跡を発見、5世紀前半に完成した可能性があるとこの池が磐余池だったと見ている。磐余池の周辺では履中の王宮をはじめ、5世紀末の清寧、6世紀前半の継体、同後半の用明がそれぞれ王宮を営んでおり、今回、堤に沿って見つかった大型掘立柱建物跡は最後の用明の「磐余池辺双槻宮」の一部ではないかとする。

百舌鳥・古市王権の履中の政治的な拠点が大王陵の地・河内平野から離れて営まれた経緯に

つについてはその大妃（皇后号は未成立だったとされる）黒比売の出自との関係が考えられる。黒比売は葛城氏の始祖とされる襲津彦の子・葦田宿禰の娘で、履中の王宮選定に当たって葛城氏の意向が関わったと見られる。先代の仁徳も襲津彦の娘・磐之媛を大妃に迎えていたが、成立間もない百舌鳥・古市王権の独自性を強く打ち出すために上町台地を王宮に選んだものの、履中の段階で葛城氏が再びその威信を発揮したのかもしれない。

反正の丹比柴籬宮は、河内平野に大王陵を集中的に展開した「百舌鳥・古市王権」にとっては、その平野の中心部に出現させた王宮として、最も象徴的と言えるかも知れない。反正は『日本書紀』によると、その元年1月に即位後、同10月になって丹比に都を造ったとするが、その出生譚で産湯の泉に「多遲（たじ＝イタドリ）」の花が浮かんでいたので「多遲比の瑞齒別」と称えたとあるが、出生前後から王権内でこの地域に影響力のある勢力に支援されていたのかも知れない。丹比は現在の羽曳野市西部から松原市東部、堺市美原区にまたがるが、先代の仁徳14年条に「是歳、大道を京の中に作る。南の門より直に指して丹比邑に至る」とあり、後の推古朝の「難波大道」と同様のルートで難波宮から上町台地を一直線に南下し、後の東西ルート丹比道や大津道と直角に交わった後に東進して丹比邑を経由することになる。このルートは竹内峠や田尻峠を越えて大和の中大路に通じており、丹比邑は瀬戸内海と通じる難波と歴代の宮都が集中した大和を結ぶ中継地の位置にあった。もちろん7世紀初頭の推古朝段階に設けられたとみられる大津道や丹比道が5世紀まで遡り得るのかという問題はある。しかし、最近の各地の古道確認調査などから、少なくともその祖型となるような原大津道、原丹比道は存在し得たと考えたい。

丹比柴籬宮の所在地は明らかではないが、江戸幕府の官撰地誌『五畿内志』（1734年）は巻第四十二（河内国之十六）で大津道（後の長尾街道＝堺大和高田線）の要衝地、現・松原市上田付近に比定する。さらに『河内名所図会』（1801年）は巻之四で長尾街道から南約500メートルの柴籬神社がこれに当たるとし、境内地には「反正天皇柴籬宮趾」碑が建てられている。また、14世紀後半成立の年代記『帝王編年記』の記述などから、柴籬神社の東2.5キロほどの現・羽曳野市高鷲、大津神社境内をこの宮跡の候補地に見る説もある¹⁷⁾。いずれにしてもこの王宮が難波と大和をつなぐ大津道の結節点を意識して設けられたとすれば、反正の東アジア外交戦略の構想に関わるのかもしれない。私見のように中国・宋王朝との駆け引きで自らの王陵を世界最大規模の大山古墳として生前に企画したとすれば、その位置を丹比道と大津道の出発地に近い大阪湾岸に設定し、自らの王宮をもこの主要な2官道に沿って営んだことも説明がつく。但し、柴籬に囲まれたという描写から想定されるように、巨大な大王陵に比べてその王宮は極めて簡素な儉しい構えだったと推認される。

Ⅶ 終わりに

「百舌鳥・古市王権」は、反正朝以降その勢いを僅かずつ減退させていく。「倭の五王」のうち、讃と見られる履中、珍と考える反正がそれぞれ誉田山古墳、大山古墳という類を見ない超巨大前方後円墳に象徴的に葬られていった後、大王陵の規模が次第に縮小化の道を辿っていくことに符合する。倭王・済と見られる允恭のそれは市野山古墳（墳丘長230メートル）、倭王・興は、筆者は記・紀系譜に沿って安康とする通説と異なり允恭の大兄（皇太子）で即位することのなかった木梨輕皇子としてその王陵をニサンザイ古墳（墳丘長300メートル、堺市）

に仮定する。倭王・武は、雄略としてその王陵を岡ミサンザイ古墳（245メートル、藤井寺市）とすれば、允恭以降、墳丘本体の長さは最早300メートルを超えることはなくなる。それは大王墓の規模をいくら誇張しても中国の宋王朝をはじめ、朝鮮半島諸国との外交・軍事交渉に得るところは限定的であることを認識せざるを得なくなったことを示している。いずれにしても百舌鳥・古市王権にとって大王墓・王宮の配置は瀬戸内海を経由して朝鮮半島・中国本土の国々との外交・軍事政策に直結する重要な戦略であった。それらは原難波津から上町台地・河内平野を経て奈良盆地に向かう官道によって構成される交通の要衝地に沿って営まれ、吉村武彦氏が指摘するように「外交使節に覇権を示す絶好の場所」であり、「王権の海外展開を見据えた行為」であった¹⁸⁾。

「百舌鳥・古市王権」の初期に当たる応神・仁徳朝、それに続く履中・反正朝の大王陵は、百舌鳥・古市古墳群の古い段階の巨大な前方後円墳に比定されるのは当然だが、それらの王宮も基本的には、河内平野を望む上町台地やその周辺的主要官道に沿う構造で展開していたことを改めて確認しておきたい。ただ、履中の磐余稚桜宮は、この大王の妃も母も葛城氏系の女性で王宮の位置選定には彼女らの強大な背後勢力が関わったと見られる。

当時の王宮の実体は、その王陵が圧倒的な存在感を誇示しているのとは対照的に「柴籬」に囲われる程度の極めて簡素な造りであったことが伺える。約200年後の大王権がより整備されていたはずの飛鳥時代においてさえ、皇極朝の王宮が「飛鳥板蓋宮」と呼ばれたように当時としては珍しかったとはいえ、板葺き屋根の外観であったことがうかがえる。宮号で大王の名前を表されるなど、大王の即位ごとに王宮が遷され新築される古代の「歴代遷宮」制においては、伊勢神宮の式年遷宮（造替）と同様にその規模や重厚さよりも、新たな地に新たな建物を現出させ、そこへ新大王を迎える理念こそが重視されたのだろう。

引用・参考文献等

- (1) 門脇禎二「河内王朝論批判」『再検討「河内王朝」論』六興出版, 1988年, pp. 126-131
- (2) 白石太一郎「百舌鳥・古市の陵墓古墳について」『百舌鳥・古市の陵墓古墳 巨大前方後円墳の実像』大阪府立近つ飛鳥博物館図録55, 2011年, pp. 16-17
- (3) 佐々木憲一「国家形成と都市」『都城 古代日本のシンボリズム』青木書店, 2007年, pp. 318-321
- (4) 寺沢薫『王権誕生』講談社, 2000年, pp. 251-258
- (5) 『読売新聞』大阪本社版, 2010年9月18日朝刊, p. 37
- (6) 『ワカタケル大王の時代 ヤマト王権の成熟と革新』大阪府立近つ飛鳥博物館図録67, 2015年, pp. 31-34
- (7) 白石太一郎『考古学と古代史の間』筑摩書房, 2004年, pp. 120-125
- (8) 熊谷公男『大王から天皇へ』講談社, 2001年, pp. 112-115
- (9) 和田萃『古墳の時代』小学館, 1992年, pp. 256-262
- (10) 塚口義信『ヤマト王権の謎をとく』学生社, 1993年, pp. 99-106
- (11) 日下雅義『地形からみた歴史 古代景観を復原する』講談社, 2012年, pp. 212-213
- (12) 森浩一『記紀の考古学』朝日新聞社, 2000年, pp. 207-212
- (13) 日下雅義 前掲書, pp. 241-243
- (14) 南秀雄「五世紀の大倉庫群」『大阪遺跡』創元社, 2008年, pp. 154-155
- (15) 田中晋作『百舌鳥・古市古墳群の研究』学生社, 2001年, pp. 35-37
- (16) 『朝日新聞』大阪本社版, 2015年8月20日夕刊, p. 4
- (17) 高城修三『神々と天皇の宮都をたどる』文英堂, 2001年, pp. 94-95
- (18) 吉村武彦『ヤマト王権』岩波書店, 2010年, pp. 92-96